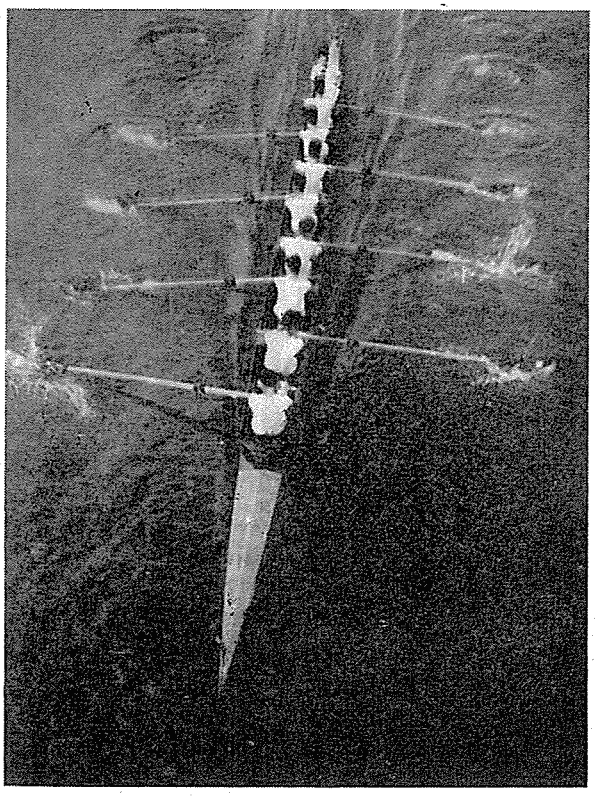
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Sept. 30th, 1955. No. 283.

關西大學學報

昭和30年9月　第 2 8 3 号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年九月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二八三号



（波をけつて一 漕艇部）

關西大學學報局

夏期調査研究報告

民俗慣行の法的承認

（その一）

珍しい民俗慣行も法の改正、社会生活の変動とともに漸次消滅してゆく。今夏関西大学法律学会鐘崎（福岡県）実体調査団は、これらいくつかの例を実見した。その一二珍しい民俗慣行の例として、この地方に行はれていた「ぬすみ嫁」と「鳥居前の奉公人契約」について紹介してみよう。

「ぬすみ嫁」というのは、可婚年令にある娘を婚姻の目的で盗んでゆくということである。その方法はまず仲人を立てゝ申込をするが拒絶されると「盗みますよ」と断つておいて機会を待つ。多くは風呂の帰りくらいをねらつて数名の青年が用意の人力車などに押し込んで遁び去り娘を隠してしまう。そして仲人又は村でも口きゝの有力者を頼んで「盗まれたんだから諦めて嫁にやつてくれ」と交渉する。娘も親も盗まれたんだから仕方がないということで承諾するというのが婚姻成立までの経過である。

これを原始的な掠奪婚の如く考えるものがあるかもしれないが、掠奪婚と考えることは間違いで、民俗として承認され慣行として行はれた変つた婚姻形式であると見ることが適当であろう。

なかには盗まれて滋々婚姻したが仲よく添とけた例が多く、結婚としては失敗ではないと語つている。もともと見合結婚とか親の定めた通り従つてきた日本人の結婚風俗としてそのことが特に批判の対象となることはなかつたかもしれない。むしろ問題は運用にある。ぬすまれた娘も最後まで承知せず、隠されている場所を親が探し当てゝつれ戻つたという例もある。

この慣行の実例に当つてみると、この地方は漁村であるから地島、大島にも男子は義務教育が終つて結婚するまでの間は青年宿（地方によつては寝宿などと云う）に寝泊りをすることに原因があつたようで、盗まれる娘は大体協力する若者仲間の承認されるところまで討議されているのが普通で、見合結婚と異ることは相手を承諾させるまでには力が加はつているということである。

しかし一面娘の方にも一応承諾の意思があるとか、場合によつてはこの方法を利用する場合もある。一応承諾している場合には、まだ嫁入の用意もできていないが、盗まれたんだから仕方がない、ということで世間体を取繕つた承諾もできる。この方法を利用する場合には一方から申込をうけたが親戚に有力者が居るとか、いろいろな理由で断り切れない場合がある。こんな場合に、こちらの方ならやつてもよいがということで娘を盗まれる。勿論こんな場合にも表面的には二三回交渉を拒絶するが、一方に対しては盗まれたので仕方なく承諾したということにして済まされる。

こうして実例を詳しく調べてゆくとなかなか面白い民俗慣行である。

これを今日の生活改革運動と比較してみることもできる。

近世末期の幕府法、藩法を見ると右の如き民俗慣行と比較して考えられる。文化文政頃の小倉、福岡、久留米各藩法によると、

一、嫁取之儀、大庄屋子供役長持壱掉、竹之皮籠一ツ相用、庄屋以下者白木櫃一ツニ不可過事

とすることが共通する冠婚葬祭に対する奢侈禁止である。しばしば奢侈禁止が発令されていることは、それを必要とする生活のあつたことを前提にして考えると右の如き民俗慣行は奢侈禁止には都合よく適合している。

今日では人を盗むとか、軟禁するなどと云つたら問題になることであろうが、別に異とせず行はれ、むしろ治世のためには奨励されなくとも黙認された制度であつたと見ることができる。

元来「嫁ぬすみ」ということは幕政の中心江戸に於てすら

ぬすんだというはうそなり手を引いて

という川柳がある位であるから、全国的に行はれた民俗のようで北九州では現在は小倉市内になつている長浜浦にも行われたと報告されている。

鐘崎地方では必ずしもぬすまれた嫁に限らないが「加勢」ということがある。嫁にわやるが、一二年実家を手伝はせるということである。その方法には嫁にやつた娘が寝泊り、食事だけを婚家でして、昼は実家に居て働く場合と、婚約祝宴をして夫の方から嫁の家に泊りに来るという場合がある。後者の場合には古い婚姻形式として「通い婚」の如く見られるが、民俗的には通い婚の遺風であるか否かは明かでない。むしろ農漁村の実際に応じ六畳一間に二夫婦というような家屋の大小等に従い双方協議の上適当に決めるということが主である。

民法の改正を云為するまでもなく、アベツクで海浜に出る者が多くなつた今日昔語りの民俗となるであろうが、これらの民俗は鐘崎、地島、大島をつゝむ、この辺り共通の風習で、これに従つて婚姻した人達がまだ多く現存する。

× ×

もとの官幣大社宗像神社の祭礼は十月

一、二、三日である。その日この神社の鳥居の辺りでその年秋の農繁期の奉公人契約が結ばれる。雇い主は附近の百姓で奉公人は殆んど大島の漁村の女に限られる。

大島という島は水田が少く米は需要量の四分の一位の生産量である。従て奉公に出た女の持つて帰る米が全島住民の食糧源となる訳である。

毎年のことでもあり近村のことであるから多くは顔見知りとか、知合の紹介とかいうことになるが、祭礼の鳥居の附近で直接交渉が行はれ、或は多少仲介の場合もあつて、米何俵で奉公するという契約をする。

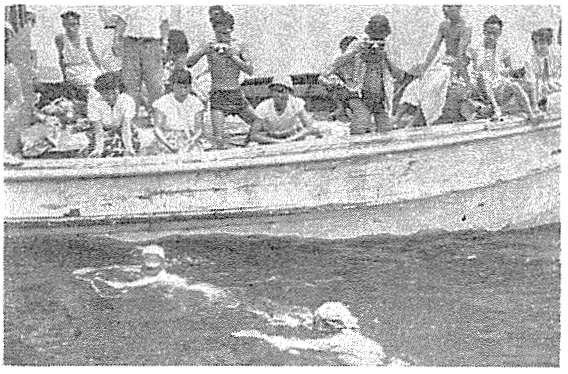
この契約では江戸時代に必要とされた「奉公人請状」の如きものは作らない。宗像神社での話では、神前で契約するという神聖観があつたからといはれるが、それも一応肯かれるとして、雇主、奉公人双方が祭礼に出かける機会を選んで行はれるということは面白い民俗慣行である。

大島で通船業を営んでいた人の話によると娘が三人もあると三四十俵も積んで帰るので少し位の借財は娘の奉公で支払ができると云はれていた。

またこの地方では貧富にかゝわらず娘のうちに他へ出たことがないと、嫁入の資格がないものとされていた。土地の人の自慢話では島一番の富有の家の娘が島を渡つて奉公に出た。奉公先では自分の家は「丸行灯」のある家だと云つて自慢してみせた。奉公が終つて主人は娘の家まで送つて来たところ「丸あんどん」位はいくつも置いてあるのに驚いたということである。

奉公に出るのは大体未婚者ということになつているが、男は秋冬三ケ月以上も海上に出て帰宅しないから既婚者が奉公に出ることもあるといはれる。

この慣行が戦時中問題になつたことは当然で、奉公人の給料を米で支払うということは許されなかつたから統制法とは正面に衝突した慣行である。



（海女の潜水作業を見る）

大体この地方の奉公人給料は米で支払うことが江戸時代からの慣習で、文化文政頃の南九州各藩法に

一　上男給米七俵限りの事
　但中男六俵其以下是に準し次第不同之事
一　上女五俵に限り候事
　但中女者四俵半其以下同断

と定められている。藩法では

一　奉公に罷出候者は庄屋手形を以居先相極め候事

となつている。またこの地方では二季居以上の奉公は給料が高くなるからという理由で禁止されている。

この慣習も数年前から表面的には職業安定法によつて消滅した。島の人の話では二年程前九州のある新聞がこれを「身売り」と誤報したために全島その新聞の購読を拒絶して慣習を改めたといつているが、最初は職業安定所が祭礼の日に出張所を設けて直接取引防止に当つたが、今では安定所が島へ出張して斡旋しているということである。

土地の人達には生活に適合したものとして親しまれ江戸、明治、大正、昭和と行はれてきたこの慣習も法律によつて漸次消滅する運命にある。

×　×

最後に実体調査の苦心談を附加へておこう。調査に当つて「何か変つたことはありませんか」と質問しても「変つたことはない」と答へられる。親しくなつて質問している間に聞き出すのである。

その筈であるというのは、話してくれる人達は自分等の生活慣習は変つていると意識して行つているのではなく、永年の慣行はそれを当然のことゝして行つているのである。

（理事　春原源太郎　記）

（六頁より続く）

例えば石器時代の遺跡や古墳の分布にしても、山本氏が殆ど手がけられてあるのであつて、それを基として私見を加えるならば、縄紋式土器は内地の各形式、殊に出雲地方とは共通する点が尠くない。しかしそれにも拘わらず、弥生式土器を見ることが極めて少く、土師器須恵器に飛躍した観がある。これらは明年度の調査の大切な着眼点の一つであると考える。

古墳の場合は恐らく、中期以後の発展が中心となるのではないかと思うが、かような点にいろいろ隠岐の地理的関係の影響するところを、よく観察しなければならないのではなかろうか。

明年からは各班それぞれ独自の行動をもつて、調査を遂行することとなるから、出発帰着の日時も適宜にして、調査班は間断なく隠岐を行動しているようになろう。これらについては島根大学と詳細に打合せて、調査をより効果的に進めることにしたい。（文学部教授・文博）

夏期調査研究報告

第二次 島根大學 關西大學 共同隱岐綜合調査

（その二）

（考古学班調査概要）

末永雅雄

昭和卅年七月廿七日鳥取県境港集合
昭和卅年八月五日島根県松江市解散

一、編成

団長　島根大学文理学部長教授　原田虎男
副団長　関西大学文学部長教授　三木治
総務　島根大学文理学部教授　今石二三雄
　　関西大学文学部教授　原弘二郎

調査擔当部門

社会学　島大教授　山岡栄一
　　関大教授　井上吉次郎
歴史学　関大教授　横田健一
民俗学　関大教授　高橋盛孝
考古学　島大助教授　山本清
　　関大教授　末永雅雄

昨年の行動以外を主としたが、今年新らしく参加の班もあるので多少とも各班同一行動をとる場合もあつた。

今年も島根県庁、隱岐支庁、各教育委員会、関係町村の各位、学校及び個人研究家、蒐藏家、新聞関係などで多大の援助を与へられ、われわれは筆紙に盡し難い厚意によつて不自由なく行動し予期以上の成果を得た。こゝに謹んで深く感謝の意を表する。以下関大参加者の概報を收録したいと思うが先ず考古学班より初める。

今年も昨年につゞき予備調査であつたのでなるべく、行動範囲を広くすることにした。島大の山本氏は隱岐にはしばしば渡つて居られるので、その行動地域を合せて、昨年以来の考古学班の予察地域は島後の周吉郡布施村を除く以外、一応全島の主要地域について大観することが出来、明年度以後の本格的調査に対する計劃の見通しをつけたが、先ず今年の経過を日記的に録する。

七月廿七日　午前九時五十分大阪駅発出雲号乗車。井上、高橋、横田教授。学生森田、三名田、三宅君の三名と私、計七人。米子で原教授、卒業生千歳君、学生勝部明生君来会。境港へ発車と共に原教授と別れその他境港に向い千歳君の宅で休憩。午後十時乗船、島大原田教授、山本助教授、学生門脇、進藤君等と一団となり、全員の集結終る。隱岐丸乗船十一時発。

七月廿八日　朝七時西郷着。隱岐支庁、教委、学校の諸氏等に迎えられ一年ぶりの再会。奈良の小川晴陽氏もこの中に混る。前日到着の由奇遇。

午後一時西郷町加茂の古墳調査、古墳の所在地は加茂湾の入口で南東面の丘陵上にあり、その上方には一三二メートルの三角点がある。眺望のよい突端を撰び、稜線上に點々として小円墳を築き、及び南東面の傾斜地にもある。しかしその反対側、即ち北面の傾斜地には見当らない。なお詳しく調査しなければ断定し兼ねるが、占地の上で注意すべき点かと思われた。

すでに盗掘せられた古墳もあるが、なおかなり難を免れたものもある様であり、規模は小さいが、すべて小石室を主とすると見られ、盗掘せられた石室二三について清掃したところ、なお慎重に調査をする必要があると認めたからすべて中止し、正規の手続を終つて、山本助教授が更めて発掘調査をすることとした。

この附近は岩石地帯であるので、古墳の封土は浅く、一尺あまりで蓋石に達する。徑二十四—五尺、高さ三—四尺、また石材は豊富であるけれども、急峻な地形は、巨石を使用することが労力的に困難であろうから、石室の石はすべて小さいが三十貫前後のものはある。一見するところ箱式棺に共通したとも見るべき竪穴式の構築様式が窺われる。石室は長さ七尺四—五寸、幅二尺前後深さ一尺あまりの様である。詳しいことは何れ山本氏の調査報告が発表される時期があるからこゝでは深くは触れない。遺物も鉄器須恵器の類を主とする様である。

歴史・社会・民俗学班は玉若酢神社参拝。

七月廿九日　都万横穴調査八時卅分西郷発バスで都万に向い十時三十分都万中学到着。都万町大字中に隧道上の丘陵に横穴のあることが、山本氏のもとに報告されたので、この現地調査によりその存在を確めた。今回知られた数は七個であるが更に増加の見込である。土質は硅藻土らしく、隱岐の他の地方の横穴と比較研究の必要がある。

都万中学校の南方の丘陵上——字を鷹野と称するところに円墳らしいものがあり現地を調査した。円丘はあるが古墳かどうかはよくわからなかつた。その南藏の畑地に板石の露出する個所があり、これは古墳であつたのを村の庄屋が一度他へ運搬したけれども、再びこゝに還して来たと云う伝説がある。しかし古墳であるかどうかはこの現状だけでは何とも云えない。

同行の歴史・社会・民俗学班は高田神社の史料を調査した。

七月卅日　西郷町藤田一枝氏蒐集資料の調査、藤田氏の蒐集品は昨年に拓影、測図等をしたが、その後の新資料も増加していた。今回は写真撮影を主とし、及び拓影、測図、模型等により、更に明年の準備をした。藤田氏の蒐集資料の中に火

災に罹つた形跡のあるものがあつたので、聞いてみたところ、蒐集後に罹災した資料もあるが、採集の際すでに火に遭つたと思われる遺物も若干あるとのことなので、この点は縄紋式土器なり、石器を使用した原始生活の間に火災に罹つたものもあるのではないかと云う疑問を残すことになる。

他に非常に磨滅した土器、石器がある。これは、海岸の住居地帯で使用せられたものが、海中に陥ちて波に洗われた為である。藤田氏の蒐集資料は石器、縄紋式土器以来古瓦に及んでいて、このたびの調査は非常な益を受けた。昨年の報告に出したが藤田氏の令弟田村二枝氏の蒐集品もかなり大量にある。ともにわれわれは両氏の恩恵を得ている。明年以後の本格調査には一層この資料が活用されることであろう。歴史・社会・民俗学班は国分寺参拝。

七月卅一日 飯田小学校裏の古墳、津井（サイ）の開かずの石箱の調査。トラック・徒歩。飯田小学校は海岸に接して建築され、背後には丘陵が迫つている。その麓に古墳があつたがいまは全く原形を知り難い、こゝから須恵器を主とし、少量の土師器が発掘された。土器の形式は奈良時代に接近した時期の様に思われる。

開かずの石箱はやゝ大きい板石で蓋をした竪穴式石室の様に見えるが、隠岐のところどころにある渠道の短小な横穴式石室か、どちらとも決定し難い。或は古墳以外の、信仰的な積石であるかも知れないと思うことは、積み重ねた石が全く露出し、現在では封土らしい形式を見ない。その所在点は丘陵の末端上にあるし、下から上つて行くところには石垣の様に少し石を積み、反対側には封土基底線と見ることの可能な状態もあるが、要するに調査の後でないと断定し得ない。たゞ石と石との間に鶏卵二個と女の櫛を置いてあつたのは、誰もかゞ信仰の為に供えたものと考える。これは地方の俗信と関係があろうから、明年更に究明すれば民俗学の対象となるかも知れない。

歴史・社会・民俗学班は西郷町釜の佐々木章氏方の史料を調査した。

八月一日 周吉郡中村縄紋式遺跡・古墳調査。九時海路西郷発。十一時到着昼食後上元屋の建福寺跡・稗田古墳・神田古墳調査。建福寺跡は江戸時代の碑石（三光国師）石像各所に残り、後の雑林中に室町期の五輪塔の笠など少々残る。守護佐々木氏の墓と伝える。

稗田古墳は建福寺跡のある丘陵と相対し、麓より、やゝ中腹に近い位置に築かれた小円墳で石室が露出している。いまより五十六年以前に、石室の蓋の一枚を運んで溝畑乙若なる人の碑の台石に使用したそれはいま部落の北の入口に現存する。神田古墳は、この上方にあると云うが地点をはつきり把めなかつた。

たゞこの附近から港へかけて、稲の成育は非常によい。今年は特別なのかも知れないが、水田の少ない隠岐の島々では、こゝらあたりが穀倉地帯の様な気がした。われわれの様に豊饒な平野の中に住むものには、これとても狭い感じがしないわけでもないが、風渡る稲葉のそよぎを見、かすかに漂つて来るその香いに何かたのもしさを覚えた。豊かな秋の稔りを祈る。

歴史・社会・民俗班は岡部りう氏の史料を調査した。

八月二日 縄紋式遺跡の調査、大字湊を中心にして、その北方松ケ浦にかゝる東北面台地には一帯に黒耀石の石屑が散布している。多くは畑地であるが、水田にも分布することと思われる。今度は水田の地域を調査し得なかつたが、石屑は改修された道路にも散布し、場所によつては縄紋式土器片の混在するところもある。遺跡の所在点と云い地形と云い、何千年かの太古に、早くもこゝに占拠して、生活をした人々のあることを思えば懐しい限りである。

地図によつて中村の地形を考えても、西郷につゞくものであり、島後では五箇・都万に、島前では海士村の中里附近とともに古代より隠岐の枢要地域であつたことであろう。

乗船場附近にも古墳があると聞いたが、そのあるものは明確でなく、或は時間の関係で割愛した。たゞ乗船場の直ぐ傍らにある洞窟は、その内容がかなり広く、現在では倉庫に使用するので、古代人の住居跡を求めたが、これもはつきりとした資料を得なかつた。歴史班は森トヨ氏の史料調査、社会・民俗班同行。

午後四時再び海路中村発。風やゝ強く波のうねり高く、日本海の水平線まで波頭が白い。舟は十四—五トンの小さな発動機船。しかしこれで太洋の波を行くのは、尤も沿岸伝いだが、山を歩きつゞけるわれわれには環境が変化してよい。

この夜九時西郷発、十二時前、井上・高橋・横田三教授、学生三宅・三名田両君別府に、上陸、別行動に移る。約一時間後われわれは山本助教授学生森田・勝部・関西学院大学学生糸賀君と知夫里島の郡に上陸。

八月三日 扇畑・カラト・古墳横手の横穴調査、扇畑古墳は知夫里湾西方の丘陵の頂上にある円墳。石室は破壊されその原形を知ることは出来ない。この古墳の所在点は、海中間近に浅島を見下し、紺碧の海と岩石に砕ける白波は、まことにきれいである。その点では大和河内の古墳が、同じく丘陵上に占地し、平野に臨むのとは環境の雄大さが非常に違つている。古墳そのものは比較にならない小規模ではあるけれども、自然環境においてはるかに優れたものである。築造者にもかゝる意図があり、占地の条件としたことであろう。

カラト古墳は扇畑古墳の麓、谷を一つ隔てゝある。短小な渠道を附した小規模の横穴式石室で、渠道と玄室の区劃がは

つきりせず、その平面は徳利形になる。これも円墳であつたが封土の大半はなくなり、玄室部は殆ど露出し、奥壁と天井石は崩れ落ちている。これらの古墳附近では、ときどき須恵器の破片があるし、碧玉の勾玉も発掘された。

横手の横穴。郡の部落の西方、やゝ高い丘陵上に横穴が二個、そのうち一個は略ほ完存するも内部には最近に削つたあとがある。これは戦時中待避壕に使用したときの加工と云う。他の一個は僅かに奥壁のみ残存。土質は硅藻土と思われる。

この附近には所々にきれいに掘つた横穴がある。その場所によつては墳墓と混同するが、現代の「芋囲い」つまり一種の貯蔵庫として掘つたものであるから、いわゆる考古学資料として取扱うのはこれから千年ものちのことに属する。現代のわれわれは間違はないだけの注意をすればよい。

夜半島大山岡教授（社会学）学生と到着。

八月四日　多沢（タタク）の横穴調査・大字多沢小前石夫氏宅地内、いま御崎大神宮を祭る。昭和廿九年四月十六日発掘。横穴は現在宅地面より約十二、三尺の高さにあり、岩磐を穿つてあるから硅藻土に掘つた様な整然さは見られないが三味胴形に似た平面に掘り込み天井と周壁の区別はある。高さ約六尺南北十一尺東西九尺の広さ、遺物配列状態は、いまわずかに小前氏の記憶に依る外はないが、横穴底部の南半部を五―六寸高く造つてあるのは、棺床であろう。小前氏の語られる勾玉、刀剣、土器の配列から見てもこの事は肯定し得られ、東枕にし入口に足を向けて被葬者を安置したものと思われる。

副葬品は碧玉の勾玉一、この勾玉は加工が甚だ粗製であるが、使用の為の磨損が認められる。装玉として他の玉類と一連にして、副葬せられたか、被葬者の身につけたのであろうから、これ以外にも多少の玉はあつた筈であるが排出された土に混つて見失つたものと思われる。

須恵器と土師器は高杯・壺・皿・提瓶の類であつて、一般形のものである。

別に銅碗の蓋と推定される径三寸余の薄い銅製品があり、その周辺が欠けているから、完形は知るよしもないが、僅かな反りと中央に孔がある点で、摘みの部分の欠失した銅碗の蓋と推定したわけである。

他に直刀二口分、これは数片に折れて詳しくはわからないが、カマス鋩一、卵円形の鉄鍔一、鞘口金具の破片らしい鉄の筒形製品若干がある。

この横穴は調査とは全く別な事情で発掘された為に、零細な遺物は殆ど検出されていない。しかしいまなお横穴の入口の下に土が堆積したまゝになつているから、詳細に調査することを小前氏に依頼して帰つた。

これらの遺物を見て、最も感じることはその全体が古墳時代後期と云うよりもむしろ、奈良時代に接近した形式を示すことである。勾玉の形が粗雑なコの字形をし、銅碗の蓋は仏器若しくはその関係、直刀のカマス鋩、須恵器の台付壺など、多くは古墳時代後期を溯り得ない時期を示し、また横穴そのものの全般的な時代判定から云つても、これは肯定されることである。従来銅碗の副葬せられた例も若干はあるが、多くは奈良時代に接近し、特にその当時の中央文化地帯以外の古墳等に見られることなのであるから、隠岐の古墳を観察する上に、ある標準を示すものと云えよう。

現在この地方でわかつているのはこの横穴一ケ所であるが、元来横穴は集団性があるから、附近で今後も検出せられることもあろうと思われる。接続地域にもう一ケ所あることを聞いて、小前氏と探したが見付からなかつた。たゞ強固な岩磐を穿つたこの形式は、掘り易い硅藻土の横穴とは異り、労力の点では甚しい違いがある。此点注意を要する。

午後六時、歴史・社会・民俗班到着。夜中松江に向つて乗船、船中今石教授西郷より帰られるのと合流。島大今石、山岡両教授外学生一名、関大井上、高橋、横田教授の外に学生四名、関学学生一名合せて十二名帰途につく。山本助教授再び西郷に引返される為にこゝで別れる。朝六時松江到着、島大、原田文学部長出迎えられ、こゝに一同会して解散。

以上今年の考古学班の調査経過を記した。他の諸班の概要もそれぞれ担当教授から報告される筈であるが最後に昨年の経過に合せて明年以後の計劃を附け加へて置くこととする。

考古学班は昨年と今年で一応明年以後の本格調査の見通しがついた。その中からつぎの個所と資料について、明卅一年以降に発掘調査を主とし、及び資料探訪の実施計劃を進めたいと思う。

一、島後の各遺跡と資料

(1) 玉若酢神社附近の石器時代遺跡と古墳の発掘

(2) 五ケ村北方の横穴発掘

(3) 中村の石器時代遺跡と稗塚の発掘

(4) 西郷町加茂の船島古墳群（山本助教授すでに発掘調査着手）発掘

(5) 藤田氏蒐集品の調査

(6) 都万村都万の横穴実測清掃

二、島前

(1) 海士村知々井の横穴実測

(2) 〃　郡山石器時代遺跡の発掘

(3) 知夫村多沢の横穴検出の為に調査

(4) 海士村田村二枝氏蒐集品の調査

(5) 焼火神社宮司松浦氏蒐集品の調査

以上の外二三の少数資料が学校、個人等に保管されているものがある。これらに対しても適宜調査する。

昨年と今年における考古学班の成果は、単にそれのみではなく、すでに早くから隠岐各地を調査されておられる、山本助教授の業績が大いに寄与している。

（以下三頁へ続く）

学内報

昭和三十年度 私立大学研究基礎設備 助成補助金交付

昭和二十八年度より文部省が私立大学の基礎設備（主として大学院を対象として）助成の目的をもつて交付される助成補助金は、本年度もまた本学大学院に左記設備のため交付されることに内定した。

マイクロフイルム撮映機及同リーダー

Corpus juris secundum（A Systematic Encyclopedia of American Law）

十六ミリ撮映機及映写機

教育職員免許法認定講習会

本学では、毎年夏期休暇を利用して、文部大臣認可による教育職員免許法認定講習会を行つているが、本年もまた七月四日（月）より八月十二日（金）まで約六週間開講した。

なお開講科目と担任講師は左の通りである。

	科目名	単位	担任講師
教職専門科目	教育原理	4	関西大学 助教授 鈴木 祥蔵
	教育心理学（発達心理 青年心理）	4	関西大学 助教授 川口 勇
	教科教育法（社会科）	4	関西大学 助教授 筧田 知義
	教育評価	2	関西大学 専任講師 辻岡 美延
	教育史	2	大阪市立大学 助教授 蜂屋 慶
教科専門科目	哲学概論	2	関西大学 教授 大小島真二
	日本史概説	2	関西大学 教授 田中 熙
	人文地理学概説（地誌学を含む）	2	関西大学 教授 横田 健一
一般教育科目	日本国憲法	2	関西大学 教授 宇田 米夫
			関西大学 教授 中谷 敬壽

秀麗寮 才三期増築工事完成

大学外苑隣接地にある秀麗寮（学生寮）は既に第二寮まで建設せられているが、更に学生の要望に応えるため第三期の増築工事中であつたが八月末完成。寮室は大体第二回増築のものと稍々同じ大きさと様式であるが、採光、室内装飾などに若干改良が加えられている。収容人員は四十名である。

学会出張

◇短期大学部入江深教授は九月十六日から二十三日まで北海道大学における日本機械学会臨時大会に出席

全日本エスペラント大会

第四十二回全日本エスペラント大会は八月二十七、二十八両日本学千里山大講堂において開催。白川理事長、岩崎学長の挨拶、大阪府知事、大阪市長、吹田市長の祝辞に続いて、関西大学歌のエス語訳をグリークラブによつて合唱などあり、出席者三七五名、（内外人二名）盛会を極めた。

二部経営学研究会主催 経営学講座

二部学友会の経営学研究会では、例年のごとく七月二十八日より九月二日まで天六学舎で、経営学講座を開催した。

なお講座科目と担任講師は左の通りである。

簿記	短大教授	冨山 忠三
経営学	大阪外大 教授	松井辰之助
経済学	大阪市大 教授	上林貞次郎
原価計算	神戸商大 教授	中村 万次
会計学	商学部 教授	植野 郁太
監査論	神戸商大 教授	山桝 忠恕
商法	法学部 員外教授	西本 寛一

海外の大学より

アメリカ・ロー・スクール学会（Association of American Law Schools）より、本学刊行「法学論集」と交換に、左記機関誌を寄贈して来た。

Journal of Legal Education, Volume 7, Nos. 3 and 4.

◇　◇　◇

カリフオルニア大学より、本学刊行各論集と交換に、同大学出版部刊行叢書のうち左の図書を寄贈して来た。

Mary Bell Price and Lawrence M. Price : The Publication of English Humaniora in Germany in the Eighteenth Century

（University of California Publications in Modern Philology, Volume 44）.

（八頁より）

て約二ケ月に亘り「現代に於て大学は如何なる役割を果すべきか」という主題の下に、関学を振出しに、高野山、大阪、奈良、京都を経てここで四班に別れ、日本各地を見学旅行し、東京都下足立区に於て小学校の運動場の堀返し作業を一週間奉仕して八月二日より三週間の本格的研究、討議を行つた。

今日の国際セミナーは選ばれた各国の学生教授達が夏季休暇を利用し、我国の学生教授と起居を共にしつつ、相互の理解、扶助などを促進せしめて今後の学生々活の援護とか教授学生の交通などのプログラムについて催され、多大の成果を収めて来た。

學生

爽涼の秋、長い休暇が明けて、九月、学生の前には前期の試験、就職試験が控えている。それでも集まれば休暇中の想い出が話題の中心となる。

文化部関係を中心に眺めてみよう。

雄弁会

雄弁会では遊説準備として六月下旬淡輪で強化合宿を行い、引続き六月三十日より七月五日の間、三班に分かれ、中国地方の遊説に出掛け広島班（リーダー商四、奈良君）、岡山班（リーダー法三、池田君）、鳥取班（リーダー経三、小島君）、の各班は概ね最初の計画通り各地で遊説を行つたが、京大事件の影響で、此等の遊説が地方では何にか目的をもつ様な印象を与え、会場の契約が取消されたり、後援の承諾を得ていたのが急に断わられると云うさんざんな苦しみに逢つたが、部員一同の熱意と、地方在住の校友の後援を得て、盛大な弁論大会を各地で行うことが出来た。

「来る！関大雄弁会」—郷内中学校にて

文芸部

文化祭に千里山文学第十三号を活版刷で発行したが、その後直ぐに第十四号の発行を計画実行に移したが、資金の面で十三号と同じく活版刷で発行されなかつたことは残念であるが、部員の団結と熱意によつて継続の難かしい発行が続けられている。なお機関誌〃千里山文学〃第十三号の創作について朝日新聞学芸欄同人雑誌評、国際新聞等に取り上げられ、又文学界九月号にても平野謙氏に論評され、各方面から注目を浴びている。

今春、関大俳句創刊。現在第二号発売中。又、八月七日には尚志館日本間で雲母との合同句会を行い、五十名以上の参加者を得て盛大に終了。

ユネスコ研究部

八月五、六、七の三日間経、三喜納君をリーダーとして、「原子力と平和に就いて」のテーマのもとに夏季セミナーを行つてお互に研究結果を発表。その後第六回日本ユネスコ学生連盟全国大会が、八月二十五、六、七の三日間、岡山市中央公民館で行われ、本学よりは経三井沢君他十名が参加、多くの成果を得たが、今後の活動として次のような方針が決定された。

国内活動

一、組織の強化

（イ）日本ユネスコ学連内の有機的結合

（ロ）支部の強化

（ハ）未組織大学えの呼びかけ

二、他の平和運動団体と協力しユネスコの理念と学生の立場から平和運動の推進を計る

三、諸種の文化活動を通してユネスコの理念を普及する。

四、国連学連との相互理解及び協力を深めるための情報交換、共同研究活動を行う。

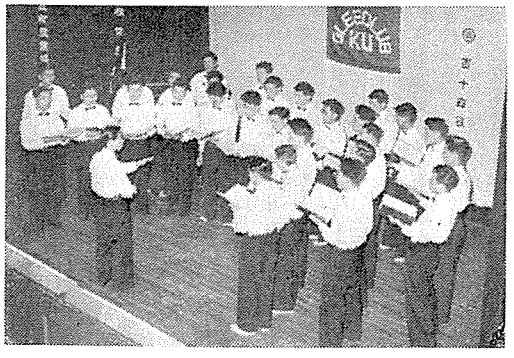
国外活動

一、海外友好団体と情報交換、協力をはかり呼びかけを行う。

二、国際会議、人物交換その他により意見の調整及び今後の発展を計る。

グリークラブ

七月二日、奈良市庁別館で奈良関大クラブが後援し超満員の聴衆を魅了し、また同月十六日、郡山高校で試験後の疲れを慰やす目的で同じく関大クラブの後援を得て彼等の絶大な拍手を得た。昨年に引き続き小豆島、土庄で合宿を行つたが合宿中は昨年此の海岸で若い青春の幕を閉じた上野君の追悼演奏会を行つた。



土庄にて

証券研究部

千里山法研が九州地方に実態調査に出掛け大きな成果をあげたことは新聞の報導の通りであるが、創立後日なお浅い証券部が金沢市で七月二十一より二十七日の七日間株式の実態調査を行つた。調査対象として金沢全市を各校下別に分け、更に各校をその世帯数に按分比例して三〇〇〇戸を無差別に抽出し、戸別訪問してその調査に当つたが、市民の理解ある協力を得て良い成果を挙げることが出来た。その結果は目下集計中であり近い中に発表されよう。

WUS国際セミナーに参加

夏季休暇をあと一日に控えた七月三日より世界学生奉仕団（通称WUS）の第六回国際セミナーに本学法学部四年の西松史郎君が二十一名の日本学生代表の一人としてこれに参加、インド、ビルマ、韓国、其ノ他中近東、欧州各国、アフリカ等の不参加国を除くカナダ、アメリカ、フイリツピン、インドネシヤ、香港、マレー、パキスタン、セイロンの各国代表学生と、尾高朝雄博士、末岡清市博士、F・H・ソワード博士などを指導者とし

（七頁下段へ）

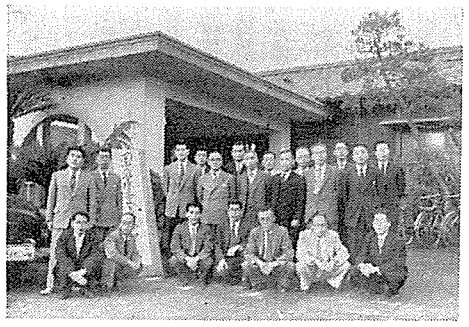
校友バッチ

校友

大分支部總会

五月二十一日午後五時より大分市北新町「共楽亭」に於て昭和三十年度総会を開催。子浦副支部長の司会で開会、野田支部長の挨拶佐藤幹事、得丸会計より夫々、事業報告、会計報告後役員改選を行い、満場一致で野田支部長の留任が決定、他の役員は支部長一任となつた。藤原副支部長の閉会の辞で、議事終了、宴に入つた。宴酣で、余興続出、首藤校友の鯉の滝登りに爆笑の渦を巻き、支長部の音頭で学歌を斉唱して閉会。

出席者
池田　穣　西村　正英　原田　耕起　別木　静哉　西　得丸　雅雄
和田　陸明　亀谷　正雄　長岡　淳美　内田　博　八郎　山田　博　渡辺　順四郎　矢野　博　宏　野田　博　藤原　亀夫



大分支部総会

千里山一・二期同窓会

千里山一・二期（大正十四年、同十五年卒業）合同の同窓会は、大阪駅長松村君歓迎の意を兼ね、六月二十五日（土）の午後阪急百貨店特別食堂で催された。

誰かわれらが若き日の学生生活を、思い出さない者があろうか。卒業以来三十年間を会つてみたいと思いながらも、会えないでいる旧友もある。在学中に大学昇格運動の大事業に熱中して、遂に本学の歴史に輝かしい足跡をのこした一・二期生には、なおさら思い出は多い。

定刻の四時には続々と珍しい顔ぶれが集つてくる。恩師岩崎学長も、昔にかわらぬ温容を現わされる。相会する者左記二十名。開会のあいさつに続いて、岩崎学長の発声にて一同乾杯。松村君のあいさつの後、学長の母校の近況と懐旧談に今更ながら恩師の有難さに頭の下る思いをする。それから次ぎ次ぎに全員立つて、テーブルスピーチに花を咲かせる。

千里山初期卒業生は、この転換点に立つ本学を、専門学校令による大学から、新大学令による大学に昇格さすべく懸命の奮闘をした。われらは幾度か決死の思いで、学校当局や先輩を説き動かした。幾多の難関に遭遇しながらも、遂に当局並びに財界、先輩の御理解と協力により待望の昇格を、大正十一年六月五日にかち得たのであつた。新緑したゝる千里山に、文化のれい明を告げる鐘が鳴りひびいた。学友会の各部も隆々たる活躍を初めた。文芸方面では、雄弁大会、語学大会、音楽会に、スポーツの面では、角力、サッカー、ラグビー、野球と各大学に率先リードするものをみた。否海外へ遠征の部も出てきた。「自然の秀麗・人の親和」の学歌もこの時代に作られ、現在の帽章もわれらによつて立案されたのであつた。

藤野　孝男　子浦　淳美　安部　泰夫
佐藤　友久　木本　善重　平居　安雄
首藤　忠司

千里山1・2期同窓会

六月二十五日に集つたわれらは、関西大学を築いてたつた校友の親和が、過し戦禍からきた混乱の中に、消えうせようとしていたが、最近における母校の発展と共に、再びこの校友の親和力が、元素の化合し結晶する如く、力強くたいとうしたことを喜び、更に益々緊密の度を高めんことを念じあつたのであつた。

当夜岩崎君がよせられた左記漢詩は、まさに本会の情景を、ほうふつさせるものがある。

「出学窓茲三十年
師友相会軌道線
忘時談笑初夏夕
乾杯百出悉紅顔」

出席者
岩崎学長　岩岸　巌　織田　佐代治　岡田　利雄
小林太三郎　西川　元　岸本　剛
久保　尚行　竹田　繁七　谷口　隆佳
松村　睦洲　松原政治郎　紙　正義
楠　正臣　角田好太郎　三宅修太郎

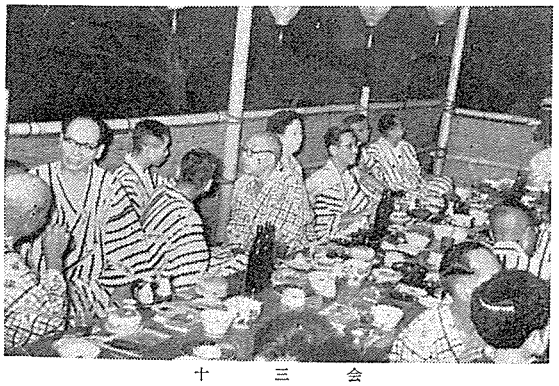
関西大学十三会

五周年記念懇親会

大正十三年前後母校で学んだ有志で組織する親睦団体である本会は、昭和二十五年夏結成以来五年、その間、会合すること十有数回に及び年々盛大な催しを続けて来た。

八月六日午後五時より大阪市阿倍野筋三丁目の燎泉閣にて母校より岩崎学長、安井校友課長を迎え、また神屋敷関大編集委員をまじえて五周年記念懇親会を開催。東京より中山、畑両氏も馳せ参じた。幹事の挨拶、学長の感想談、校友課長より母校の近況報告後開宴、談論風発、会員のかくし芸、テープレコーダーによる学歌の合唱、宴はいよいよ佳境に入り焦熱の苦汗もふつ飛ぶ観あつて午時十時散会。

森　寛紹　山崎　敬義　吉田　奎文
神保　敏男



十三会

出席者（○印幹事）
井上　賢一　畑　孝二郎　蜂木　茂驥
○頓戸　勇　吉田鹿之助
玉置転留男　中山　幸市
中谷　政男　矢野　義一
竹林　直信　名倉　熊蔵
小西　直意　○江口　透　佐藤　孝好
広実　郁雄　森川　太郎　杉田　兵作
（本会の連絡先は大阪府庁内府会調査課頓戸勇迄）

千里山昭八会

七月二十三日（土）午後五時より舞子に於て第三十四回例会を開催、当日は海水浴と一泊の清遊とを兼ねた。一風呂浴びて一同打寛ぎ明石海峡より吹き来たる涼風を満喫しつゝ議事に入る。先づ四国より帰来した中村重男氏を従前通り幹事に推しこれを決定。次に母校七十周年記年拡充寄附金の勧誘と督促に関する件、十一月には母校七十周年を祝して盛大な例会にする件、等を決めて小宴に入つた。

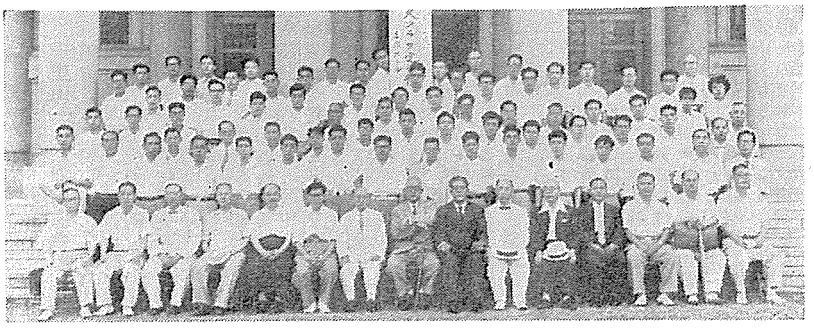
今回は浜田実氏が新顔として出席してくれたので、勢い話しは二十年前の懐旧談に花が咲いた。多賀氏から清酒の寄贈があり気焔益々あがり、北村氏のビルマ戦線談はしばし満堂を圧し一同を笑倒せしめるの慨があつた。実に愉快なる数刻を過し、一同枕を並べて海波岸うつ高楼に夢を結ぶ。

明れば廿四日（日）快晴、澄みつた海水に身を浸したり、娯楽に時を忘れたり、思い思いの行動を楽しみ午後一時散会した。

当日の出席者
浜田　実　中村　重男　浦野健二郎
中江　巽　大島　武夫　中家　利国
多賀　恒一　武田　晴夫　結城　丙太
北村文之助　木下　忠夫　泉　巌
平井　三朗

神戸支部總会

七月三十日神戸商工会議所に於て本年新卒業者歓迎会を兼ねて開催母校より白川理事長、岩崎学長の出席を得、来る十一月の七十周年式典の諸計画を聞いた後海外留学より帰朝の堀正人、高木秀玄、広瀬捨三、三教授を招聘して欧米の学界消息や奇談、見聞記の土産話に時の過ぐるのを忘れて興味深く聴講した。出席者九十名。



神戸支部総会

（十一頁より続く）

四、評議員の部

金参万円也　神宅賀壽恵

計金参万円也

評議員累計

金百四拾四万弐千四百円也

五、事務職員の部

金壱万弐千円也　船引潤一郎（第一、二回合計額）

計金壱万弐千円也

事務職員累計

金百参万六千四百円也

合計金五拾万参千六百円也

累計金四千百壱万四千四百九拾九円也

（合計、累計は重複申込を含まない実寄附金額である）

昭和三十年九月三十日発行
關西大學學報　第二八三號
大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地
編集兼発行人　久井忠雄
大阪市北区川崎町三八
印刷所　株式会社　ナニワ印刷所
電話堀川（七三〇二）番
（三一九三）番
大阪市大淀区長柄中通二丁目
発行所　關西大學學報局
電話堀川（35）一七五六番
振替大阪二六七七二番

寄附金分類別集計表

昭和三十年八月三十一日現在

申込種別	件数	金額
篤志家	七名	九、一二二、五〇〇・〇〇
関係業者	五六	八、〇七七、一七〇・〇〇
地方支部	二八団体	四、七六三、五〇〇・〇〇
職域会	二三団体	七六五、〇〇〇・〇〇
同期会	一八団体	三、〇三五、五〇〇・〇〇
同窓会	三団体	一、〇一七、〇〇〇・〇〇
クラブOB会	五団体	四六九、五六〇・〇〇
個人	三〇七	八四〇、一〇〇・〇〇
計		一〇、八九〇、六六〇・〇〇
教育後援会	一、四二三	九、七〇四、六〇〇・〇〇
一高父兄会	一五二	三、二九〇、六四四・〇〇
学校法人役員	三	九五〇、〇〇〇・〇〇
評議員	五四	一、四四二、四〇〇・〇〇
教員職員 大学	一〇六	一、七九七、〇〇〇・〇〇
一高	二四	一三五、〇〇〇・〇〇
一中	一七	七八、〇〇〇・〇〇
幼稚園	五	五、〇〇〇・〇〇
計	一五二	二、〇一五、〇〇〇・〇〇
事務職員	二五七	一、〇三六、四〇〇・〇〇
合計		四六、五一九、三七四・〇〇
重複額		五、五〇四、八七五・〇〇
差引合計		四一、〇一四、四九九・〇〇
收納額		三四、四三七、〇〇四・〇〇
未收納額		六、五八七、四九五・〇〇

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいただきました。八月三十一日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和三十年九月

学校法人　關西大學

關西大學七十周年記念拡充資金寄附者芳名（十五）

昭和三十年八月三十一日現在（順序不同、敬称略）

一、篤志家の部

金参千円也　河井昇三郎
計金参千円也
篤志家累計
金九百拾壹万弐千五百円也

二、校友の部

1 地方支部

イ、大阪支部

金参万円也　神宅賀壽恵
計金参万円也
累計金弐百六拾七万四千円也

ロ、川辺支部

金壹万円也　谷口隆佳
（才一・二回合計額）
計金壹万円也
累計金弐拾参万九千四百円也

ハ、東住吉支部

金参千円也　小泉博之
金参千円也　深井敏雄
金弐千円也　樋口衛
金弐千円也　森壽藏
金弐千円也　山田慶一
金壹千円也　樋口学
金壹千円也　樋口順亨
金壹千円也　木田邉造
金壹千円也　岩崎哲郎
金壹千円也　木下幸一郎
金壹千円也　坂井忠男
金壹千円也　植木英三
金壹千円也　戸田忠男
金五百円也　山内理
金五百円也　谷村道人
金五百円也　平井滋
金壹百円也　蔭山信次郎
計金弐万壹千六百円也
累計金九万七千六百円也

ニ、呉支部

金壹万円也　鍵尾豪雄
金壹千円也　岡本積
金壹千円也　原一彦
計金壹万弐千円也
累計金弐万八千円也

ホ、但馬支部

金参千円也　余根田広次
計金参千円也
累計金壹万参千円也
地方支部累計
金四百七拾六万参千五百円也

2 職域会

大阪府庁秀麗会
金参拾五万円也
計金参拾五万円也
職域会累計
金七拾六万五千円也

3 同期会

イ、昭六会

金壹万円也　吉田輝彦
金壹万円也　柳沢幸治
（才一・二回合計集）
計金弐万円也
累計金八拾弐万参千円也

ロ、六念会

金参万五千円也　桂忠雄
金参万円也　永田規矩夫
金弐万円也　大月伸
金壹万円也　乾義雄
金壹万円也　弓場元一
金壹万円也　横田長次郎
金壹万円也　山根滝藏
金壹千円也　佐野広治
計金拾弐万六千円也
同期会金参百弐万五千五百円也

4 同窓会

関甲クラブ

金壹万円也　北川勝藏
計金壹万円也
累計金七拾六万八千円也
同窓会累計
金百弐万七千円也

5 個人

金壹万円也　岡野衛士（大11専法）
金壹万円也　吉田修之（昭18大経）
金壹千円也　石丸武穂（昭18大法）
金壹千円也　木下清（昭13大法）
計金弐万弐千円也
累計金八拾四万百円也
校友累計
金壹千八拾九万六百六拾円也

三、教育後援会

金壹千円也　北川繁雄
金壹千円也　角野喜作
計金弐千円也
教育後援会累計
金九百七拾万四千六百円也

（十頁へ）

關西大學創立七十周年記念

拡充資金募集趣意書

わが關西大学は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾来六十有余年校友先輩の苦心と不断の努力に依つて目覚ましい発展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私学の雄として、自他共に許す一大学園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、国家社会の進運に大きな寄与をなし得たことは、われわれの深く喜びとするところであります。学園発展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く独立国家として出発しましたが、国家の前途は甚だ多難であります。わが国は今後、文化国家として世界文化に貢献すべきであります、またそれによつて友邦の信に応えなければなりませんが、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本学は、大学の崇高な使命を自覚すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、学の実化という理想に向つて、益々邁進したいと思います。本学が新学制に基き、各大学にさきがけて、大学院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において将来の飛躍的な発展を意図したからに外なりません。

本学は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計画を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大学院、大学ホール、経済学部商学部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計画中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部文学部学舎の改築、二部学生を収容するための天六学舎の増築、学生に対する施設の一部として、千里山尚志館（学生食堂学友会部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着工準備中でありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代的設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には学園は全く面目を一新すると思います。

こうした外観の整備と相俟つて、特に重要なものは、大学の真価を決する教授陣容の充実であります。二十八会計年度においては教授十名、助教授八名、[illegible]半はすでに補充致しました。

教職員の待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の経済状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充実と共に、研究用図書の完備も大切でありますが、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、学舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の経済的混乱により本大学法人の経理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず関係者各位その他の御援助により御醵出を仰がねばならぬ実情にあります。

大学の生命は不朽でありますが、学園の生々発展を希うためには、各位の学園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、学園の繁栄を念願する各位の御賛同を請い、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、学園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な発展を期し得ることを信じます。

何卒御協力の程切に願上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長　岩崎卯一

關西大學理事長　白川朋吉

創立七十周年記念事業学舎増改築概要

一、工事費総額約三億三千五百万円

二、工事概要

(一) 千里山法学部文学部学舎改築（鉄筋コンクリート造）
三階建　二千六百六十八坪　工費約二億六千四百万円

(二) 天六学舎増築（鉄筋コンクリート造）
五階建　三百七十八坪　工費約三千万円

(三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建　三百二十一坪　工費約六百万円

(四) 関西大学第一高等学校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建　七百八十五坪　工費約三千五百万円

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年九月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學學報　オ二八三号　九月号